

市民の学びの場としての日本地名研究所 の取り組み

日本地名研究所 理事
『地名と風土』編集長

小田 富英



谷川 健 一

設立までの経緯

悪名高い住居表示法による地名破壊を防ぐために私が「地名を守る会」という全国組織を結成したのは、昭和53年3月のことである。私はその運動を通じて、地名破壊の背後には、地名に対する無智がひそんでいることを知り、地名研究の必要性を痛感した。このことは、昭和54年2月に日本放送出版協会から刊行された『現代「地名」考』（谷川健一編著）の結末にも記されている。すなわち同書のしめくくりの言葉は「数限りない地名が、今や風前の灯の運命にあります。今、総合的な視野のもとで地名資料の収集につとめなければ、やがて遠からず、やろうにもできない事態になるかと思われまゝ。国立および各自治体立の地名研究機関の設立を、私たちは今こそ声を大にして叫ばなければなりません」と書かれてある。

昭和55年7月「地名を守る会」は横浜市で開かれた第1回日本文化デザイン会議で「地域文化賞」を受賞した。同年11月、川崎市で開催された映像祭の席上、私は長洲神奈川県知事と伊藤川崎市長に地名研究所設立の構想を訴え、協力を要請し、両氏の快諾を得て、その構想は具体化の一步を踏み出すことになった。

研究所設立の地ならしとして、「地名を通して『地方の時代』を考える全国シンポジウム」が昭和56年4月17、18日の両日、川崎市の市民プラザで開かれた。主催は川崎市と実行委員会である。この時の参加者数は500名以上、そのうち200名が地方公務員であった。シンポジウムの開会の冒頭、長洲知事と伊藤市長はこもごも地名破壊に行政が手を貸したことを反省するという内容の挨拶をおこなった。それは行政側の地名に対する姿勢としては画期的なことであった。

シンポジウムの成功は地名研究の風潮を大きく前進させた。昭和56年10月20日「日本地名研究所」が川崎市の一隅に設立された。昭和37年に「住居表示に関する法律」が施行されてから、じつに20年目のことである。

昭和五三年三月

谷川健一ら「地名を守る会」発足 次頁資料

昭和五六年四月

地名を通して「地方の時代」

を考える全国シンポジウム

昭和五六年一〇月

日本地名研究所設立

総特集 地名・町名を守る

地名・町名は単なる符号ではない。そこには
民衆文化の重みがこめられている。あきらかに
行政的便宜主義による「地名つぶし」に住民
の知恵と論理が対抗する！

谷川健一 ●地名を守る意味
池田末則 ●古代地名の保存
飯塚明克 ●新住居表示にみる
新町名命名の問題点
丹羽基二 ●地名と姓氏は親子です
コトコト 地名のつくりかた
清水健太郎はか

各地からの報告

文京・弥生町 三鷹・深大寺
新湯・美守 高知・京町
新宿 神奈川・鶴崎
沖縄

資料
地名・町名、実地調査、研究など
地名を守る会、調査費・補助金
活動方針

ほか

「地名を守る会」

責任編集 運営委員会



総特集Ⅱ 地名・町名を守る

責任編集「地名を守る会」運営委員会

地名を守る意味

谷川 健一 8

古代地名の保存

池田 末則 10

地名と姓氏は親子です

丹羽 基二 16

地名ろん

蔵市の「丁張」のこと

茨木のり子 26

地名を考える

本間 信治 28

地名「タマ」の変遷

宮本 常一 30

横須賀市における町界町名変更の過程

桜井 澄夫 140

貧困行政が地名を変える

今井 政治 142

各地からの報告

春日部・浜川戸

松本秀男 82

文京・弥生町

足立・内匠本町

三鷹・深大寺

大阪・船場

新湯・美守

松江・雑賀町

高知・京町

札幌

新宿

彦根

神奈川・鶴崎

米沢

沖縄

仙台

昔の町の名

池田 豊阿 21

住居表示への疑問

廣志 36

新住居表示にみる新町名命名の問題点

鏡味 明克 43

歴史の証し

川平 朝申 131

国土調査による地名の統廃合

高久田大一郎 146

消えた地名・なつかしい町名

清水健太郎 大森宏 土井卓治 中原三十四 赤瀬守 山下欣一 高崎裕士 70

異議あり！ 地名・町名の改変

小島俊一 星野光儀 清水理太郎 中葉博文 乾健治 吉田茂樹 高橋文雄 白妙剛二 134

地名を守れ！

原田正彰 金田久雄 石井忠 白石昭臣 川上与三吉 工藤力男 倉田正邦 116

アンケート・葉書でひと言

資料篇

■年表・資料抄 ■(資料1) 国語審議会建議「町村の合併によつて新しくつけられる地名の書き表し方について」 ■(資料2) 審地整理促進協議会「町名地番整理に関する陳情」ほか ■(資料3) 住居表示に関する法律 ■(資料4) 同施行令 ■(資料5) 同法案に対する附帯決議 ■(資料6) 街区方式による住居表示の実施基準 ■(資料7) 最高裁判決 ■(資料8) 地方自治法(抜粋) ■(解説) 住居表示法・実施基準、およびその施行上の問題点 151

川崎市に隣接する横浜市緑区の私鉄沿線の急激な宅地化に因る地名変更というか新造には嫌悪感を持っております。全国至る所、全く粗製濫造としか思えぬ何とも文化的に根のない軽薄な町名変更は実に残念至極であります。どのまち（市）へ行っても、中（中央）町、東西南北、栄、幸、寿、旭、朝日、緑、青葉、若葉、並木、泉、錦等々、また振興住宅地に於ける○○平、××台、△△ヶ丘の氾濫で、歴史的風土も個性も何もあつたものではありません。

狛江市の小足立、覚東をなくす必要がどこにあつたのか。東京の地図帳を見て咄然とします。少し列挙しますが、千代田区三年町、竹平町、中央区通、江戸橋、両国、越前堀、小田原町、宝町、港・文京・台東・中野各区旧町名、新宿区戸塚町、諏訪町、花園町、角筈、十二社、淀橋、柏木、百人町、江東区洲崎町、平井町、大田区森ヶ崎、品川区上大崎中丸、同長者丸、大井地区の各旧町名、世田谷区廻り沢町、などなど。

なくすべきでなかつた地名はきりがありません。

昭和初期の東京市区分地図に今の「池袋本町」は、池袋字雲雀谷戸、今の「目黒本町」三・四丁目が月光原など美しい地名が載っているのをみて、住居表示が都市化のなせる技とはいえ、嘆かわしく思えます。

地名に関する私の「苦情」は際限がありません。

それでは貴研究所の前途に大発展のあることを祈り、この辺で失礼致します。

昭和五六年一〇月二二日 小田原市の療養所にて M

●地名は時間の化石、地名は日本人の共通意識の結晶体

地名と風土

人間と大地をむすぶ情報誌「地名と風土」第1号

日本地名研究所

谷川健一・責任編集 三省堂

●座談会 地名の大切さ、美しさ、面白さ

●ヨーロッパ史と地名研究 ●世阿弥の佐渡

記・紀・万葉の地名／地名改変の歴史

●日本の景観と風土 ●井水路をめぐる風土

地名と教育を考える



地名と風土

1

創刊号／一九八四年四月刊 三省堂

創刊の言葉 ●谷川健一

8

地名の大切さ、美しさ、面白さ

鏡味明克・市川健夫・田中澄江・林英夫・谷川健一(司会)

10

座談会

ヨーロッパ史と地名研究

増田四郎

21

世阿弥の佐渡

金魚書の世界

馬場あき子

27

特集1

記・紀・万葉の地名

飛鳥地名考

池田末則

34

美女に見られた古代の畝傍山

吉田金彦

50

特集2

地名改変の歴史

地名改変の歴史 古代から近世まで

大石堪山

54

ルポルタージュ 「住居表示に関する法律」の20年

奥田史郎

64

対談

日本の景観と風土

芳賀徹・樋口忠彦

74

フィールドワーク

井水路をめぐる風土

琵琶湖西・高島町音羽の風土と歴史的背景

黒沢夕子

83

海の地名と漁民の空間認識

越前海岸漁村社会調査第一次報告

葛野浩昭

104

「ダイナ」の語感 東京湾の漁業地の場合

青柳精三

114

地名と教育を考える

地名教育の構想

谷川彰英

116

アイヌ語地名を授業で

松本成美

125

地名と地名学

鏡味明克

130

地名基礎講座1

海外情報

134

書評

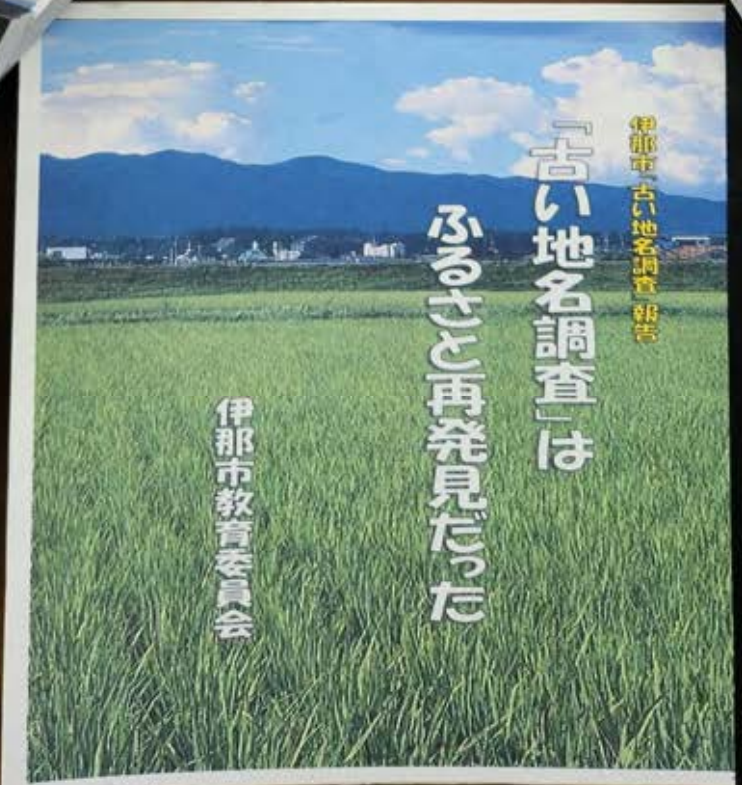
138

日本地名研究所の歩み

141

44年間続いた 日本地名研究所の取り組み

1. 各地地名研究会との連携 と 地名調査支援。
2. 年に一度、「全国地名研究者大会」を実施。会員の交流を図る。
 昨年は 伊賀大会。
 今年は11月に遠野で「アイヌ語地名研究」大会。
 記念講演、小野有五先生(本シンポ発表者)。
3. 毎年、『地名と風土』刊行。 前年の大会記録に加え多彩な執筆陣。
4. 年に3～4号の「日本地名研究所通信」発行。
 現在、109号。
5. 首都圏中心の「地名探訪」。年に1～2回。
6. 「地名講座」の開催や書籍の刊行など。



伊那市「古い地名調査」報告

「古い地名調査」は

ふるさと再発見だった

伊那市教育委員会



川崎の町名

日本地名研究所編 ■ 発行 ■ 川崎市

改訂版

市制100周年を記念して、川崎市内にある町名の由来、
変遷がわかる「川崎の町名」を改訂

続・四千人が二千の村で聞き取った 四万の地名、しこ名

—— 佐賀県歴史地名地図3 ——
付録「九州各県地名データ」(除く宮崎県)(CD)

唐津市・玄海町・伊万里市

服部 英雄

解説／地名一覧
地名地図(1～98)
正誤地図
付録 地名CD

花書院

続・四千人が二千の村で聞き取った四万
佐賀県歴史地名地図3 唐津市・玄海

[解説]

服部 英

佐賀県・福岡県・長崎県・大分県・
熊本県地名データ(宮崎県を除く)。
学生レポートデータ

■ 源内谷戸凌線



■ 麻生台団地～月読神社



■ 麻生不動～真福寺川沿い



■ 柿生駅商店街前（解散）



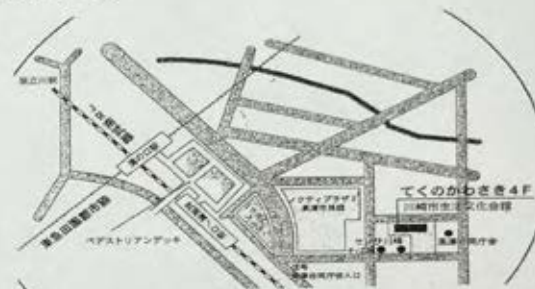
品川探訪 江戸に先立つまち・品川を発見!

品川のまちを東海道に沿って歩くと、多様な寺院が軒を連ねています。これらの寺院のほとんどは、品川宿の開設以前、品川が関東の玄関港であった時代に創建されたものです。まち歩きで江戸のまちに先立って発展した品川を発見しましょう。併せて興味深い品川の地名も紹介します。

I 【日 時】 2023 年 10 月 7 日(土) 13:30~16:00

【内 容】地名講座 品川の歴史をふりかえる
オリエンテーション・散策コース解説
【講 師】柘植信行(品川区立品川歴史館前副館長)
【会 場】川崎市生活文化会館(てくのかわさき)
川崎市高津区溝口 1-6-10 4F 展示室
☎044-812-1106(日本地名研究所)

JR 南武線武蔵溝ノ口駅・東急田園都市線溝ノ口駅
北口駅前テラスデッキ(ノクティ)裏



II 【日 時】 2023 年 10 月 28 日(土) 13:00~15:30

【内 容】町歩き 江戸期より古い品川を歩く (雨天決行)

13:00 集合: JR 大井町駅西口(品川側 東急大井町線がある改札口)

15:30 解散: 京浜急行・新馬場駅予定
(JR 品川駅まで徒歩 20 分)

【講 師】柘植信行(品川区立品川歴史館前副館長)

【コース】大井町駅→海晏寺→品川寺→諏訪神社→
天妙国寺→長徳寺→常行寺→御嶽稻荷神社
→願行寺→海蔵寺→本光寺→品川神社

参 加 費: 一般 3,000 円。日本地名研究所会員 1,500 円。

(イヤホンガイド使用料、消費税、傷害保険料、資料代を含みます) イヤホンガイド使用のため、10 月 7 日以降のキャンセルは、使用料 1,000 円を徴収させていただきます。

募集人数: 40 名 締切: 9 月 29 日(金) 電話・FAX・E-mail にて受付ます。

ただし、定員になりしだい締め切りとさせていただきます。

当日連絡用 日本地名研究所携帯電話 090-2550-3489



●地名基礎講座・地名探訪ツアー 申込用紙 ●

ふりがな
氏名

所属

両方参加

住所 〒

10 月 7 日のみ

電話番号

FAX 番号

10 月 28 日のみ

E-mail

※上記から選んで○を付ける

日本地名研究所 〒213-0001 神奈川県川崎市高津区溝口 1-6-10 川崎市生活文化会館 4 F

電話 044-812-1106 FAX 044-812-1191 E-mail: chimeiken@chimei.people.co.jp

品川寺

東海三十三所
觀音靈場
第廿壹番
品川寺

七觀音靈場
聖觀世音菩薩
海照山品川寺



二 杉並の通称地名

千葉 徳爾

1 地名としての通称

地名とは何であるかがまず考えるべき課題となる。およそ人が地表で生活する場合には、その地表の範囲を適宜に区分してそれぞれの性質を認識する必要が生じる。それはそれぞれの土地を生活上の用途に応じ、使いわけなくてはならないからで、その用途には負の使用、つまり存在するために生活に不利なもの、障害となるものも含まれる。そして、それらを記憶してゆくにためにそれぞれに命名することになる。かような命名もしくは呼称が地名と称せられる。

ところで、人は一般に居住する場合には複数の協同して生活するから、特定の場所について共通の認識をもつ集団では、それぞれの成員はこの場所を同一の呼称で呼ぶことになるし、その次世代はこの呼称を教育されてゆく。かように一つの社会集団の成員が同じ土地（地点、地域等）に対して共通に呼ぶ名称が地名であり、その最小単位はおそらく家族である。このことから逆に、ある土地の呼称が地名になるためには、その社会の成員のすべてによってその呼称と場所との一体性が承認されなくてはならず、そのような呼称のみが地名となるのである。

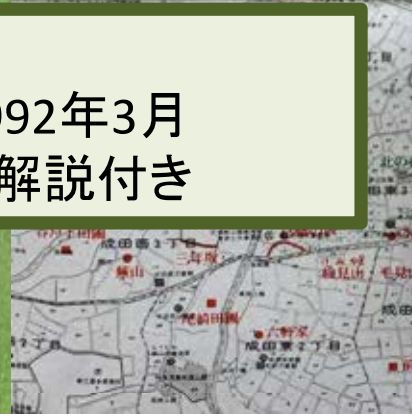
この段階では地名はまだ言葉であって文字にはなっていない。それが

文字化して記録に止められ、その中から支配者によって必要と認められたものが、しだいにその地名で指示された地表範囲を指定されて領域地名あるいは公称地名として分類されることになる。一般に文書ことに公文書に記載される地名はこれに属する。しかしながら、地名そのものはそれがすべてではない。

文字化されない言葉だけの地名、それがここで問題とする通称地名であるが、そのうちには公称地名以外のさまざまな形が含まれる。もちろん、言葉のみで呼ばれる文字化された地名もあるが、その場合でも文書に記されることは稀であり、もとの意味が何であったかが不明となったものも少なくない。また、その呼称を用いる集団あるいは社会の成員が少くなったり、呼称の根拠であった地形や地物が変化消滅したりすることによって、さらにその地名そのものを使用する必要がなくなる。ことによって、通称地名は容易に消滅して痕跡を留めなくなる。公称地名の多くは文字化することで文書、記録、地図などに記載されて化石化して残されるが、通称地名の多くはそのような機会が稀である。その呼称を知る者の死亡、その場所の変形、消滅やそれを記憶する者の忘却などと共に、通称地名は完全に失われることが多い。

そのほかにも通称地名がもつ性質はいくつか認められるのであるが、それらは以下の杉並区における通称地名の実例を述べながら、考察を加えてゆくこととしたい。

なお、現在知られている小字といわれている公称地名の大半も、実はある時代までは通称地名であったと考えられる。その理由は、それらの大半



杉並の通称地名

杉並の通称地名調査報告書

1992年3月

千葉徳爾の25頁にわたる解説付き

「古い地名調査」は

ふるさとと再発見だった

伊那市教育委員会

『地名と風土』第11号

(二〇一七年三月刊)

竹松亨の報告掲載

文 論

伊那市が取り組む古い地名調査

竹松 亨

一、二つのアルプスに抱かれた伊那市

昭和29年、長野県南部に位置する伊那町、富県村、美鷲村、手良村、東春近村、西箕輪村が合併し、伊那市が誕生した。

その後、昭和40年に西春近村、平成18年に高遠町、長谷村が合併し、現在の伊那市となった。

市は中央アルプス、南アルプスという二つのアルプスに抱かれ、そのただ中を天竜川が北から南に向かって流れている。

人口はおよそ7万人、約700平方キロメートルの広大な面積を持つ自然共生都市である。2年連続「子育てにびったりな田舎」として全国第1位に選ばれている。

二、なぜ古い地名調査を

地名にはその土地を舞台に生きた人々の心と姿、生きる知恵が含まれ、郷土を愛する人々の象徴にもなってきた。

また、東日本大震災では、先人が地名にいろいろなメッセージを残しておいてくれたことがわかった。

しかし、今、その大切な地名が様々な理由で消え去ろうとしている。



ジェクトが立ち上った。プロジェクトの第一は伊那に残る地名・地区をつ頃、どのようちで生まれ、どのち変遷を経て今日名・地区名になを調べること。

第二はそれら名・地区名が今、たちにとってどんな意味を持つかなること。しかも市民の皆さんと探ること。

第三はそれら

日本地名研究所 現状と課題

会員は約200人のまま横ばい状態。

連携地名研究会は、かつて60以上あったものが、高齢化が進み、半減。

単独で「地名研究者大会」を運営企画できる体力がなく、このところ、本部中心の実行委員会形式で実施。

個人会員が増えていることから、意見交換の場の保障にアイデア求められる。

また、このままでは消滅していく「小字」「通称地名」調査に早急に取り組まなければならない現在、各地の地名研究会の組織力の低下が大きな問題。

そして何よりも、財政的な問題が今後の課題。 最後にお知らせ。

日本地名研究所通信



第109号

二〇二五年

四月三日発行

〒410 神奈川県川崎市高津区溝口一六二〇 川崎市生活文化会館4F ☎044-821-2106 〇〇四四一八二二一九

柳田国男生誕百五十年・伊能嘉矩没後百年記念

第四四回 全国地名研究者 遠野・三陸

アイヌ語地名研究大会への誘い

小田富英

研究報告、実践発表

異界・遠野で「ししになる」

伊能嘉矩とアイヌ語地名

（東北アイヌ語地名研究会）

地名が語る悠久の暮らしと文化

（アイヌ語地名研究会）

「ムックリ」の演奏

川上さやか（同）

岩手でのライフビュー・地域医療・人生会議の取り組み

―高齢者の生きる希望の再発見―

私の身近なアイヌ語地名と人々

（釧路地方の地名を考える会）

安土城の「あづち」について

（アイヌ語地名懇親会）

終了後、日本地名研究所総会

懇親会 六時から八時

あえりあ遠野 交流ホール

第一日目 開会 一〇時

あえりあ遠野中ホール

〒028-0524 遠野市新町1-10

開会挨拶、来賓挨拶

基調講演 遠野における「郷土研究」のあゆみ

―伊能嘉矩・柳田国男・萩野馨を結ぶ― 小田富英

記念講演 「新しいアイヌ学」のすすめ

―知里幸恵の夢をもとめて―

小野有五

第二日目 エクスカーション 大まかな予定です。

Aコース 遠野・花巻コース 大償―小付内―久出内―早

池峰神社―折壁―斯波町―音部―新花巻解散

Bコース 住田―陸前高田コース 世田米―高田―小友―

陸前高田博物館、復興祈念公園―長部―気仙―

一関解散

Cコース 遠野・来内伊豆神社コース 遠野博物館、物語

の館―伊豆神社―鍋田など―神遺神社―遠野駅

解散

今年の一二月一五日、一六日

柳田国男生誕百五十年・伊能嘉矩没後百年記念の

「全国地名研究者大会」を遠野で開催します。

詳しくは、日本地名研究所のホームページへ。

申し込みは七月から。